

特別企画 (パネルディスカッション) 「原子力施設等で発生したけが人の 医療機関への受け入れと看護について」

Acceptance of injured persons at nuclear facilities and others to medical institutions and nursing care

小山 修司 太田 勝正

Shuji KOYAMA Katsumasa OTA

名古屋大学大学院

Nagoya University Graduate School of Medicine

原子力機関でけがをした作業員を、医療施設が受け入れないという事例があるとのことである。これには、受け入れ施設のスタッフの放射線や放射性物質についての知識が不足しているための恐れによること、受け入れ施設の管理者が放射性物質での汚染について、その後の風評被害を恐れていることなど、いくつか理由があるようであるが、人命を尊重する医療人として問題だと考える。本企画は、この様な事例にどのように向き合っていくかを考えることを目標とした。パネラーの1人目として、茨城県立医療大学の佐藤斉先生には、原子力災害における医療体制の現状と目標や測定のお話をいただき、事故の想定と十分な準備の重要性を認識することや、その中で汚染の測定や評価は容易であることをお教えいただいた。2人目の日本原子力研究開発機構の高田千恵先生にはこれまでのいくつかの事故事例とそれぞれの対処、事故での被ばくによる発がんリスクについてお話をいただき、汚染の評価では放射能の強さだけでなく汚染面積も合わせ総合的に判断することが大切で、これをしないと過大に評価される恐れがあること、またがん死亡リスクについては、想定される最大に見積もられた被ばく線量でも、ほかの生活習慣による要因に起因するリスクと大きな差がないことが示された。3人目の弘前大学大学院の漆坂真弓先生には、被ばく医療を行うための看護師に必要な教育や訓練について、また、そうした教育の現状と弘前大学で行われている研修の詳細について、さらに放射線災害における看護師の役割についての調査の詳細をお話いただいた。看護師養成機関での放射線に関する教育時間が少ないこと、また、研修などに繰り返し参加して知識を深めたり広げたりすることの重要性、専門職としての看護師の意識の持ち方など示された。その後の討論の中で、放射線災害は原子力発電所での災害だけでなく、病院や研究所での放射性同位元素によるものもあるということ意識すべきという意見、放射線についての教育、訓練というとハードルが高いと思われがちなので、職場の中での会話レベルで放射線を話題にすることが有用であるという意見など聞かれた。集約として、十分な教育訓練がなされれば、放射線災害での汚染は容易に測れること、除染は容易であること、被ばくしたとしてもリスクが大きくないこと、なにより人命救助が最優先ということを再認識することが確認できたのではないかと思われた。

doi: 10.24680/msj.6.1_74